

# 大川の水

芥川龍之介

青空文庫



自分は、大川端おおかわばたに近い町に生まれた。家を出て椎しいの若葉におおわれた、黒堀くろべいの多い横網こうじの小路をぬけると、すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭ひゃっほんぐいの河岸かしへ出るのである。幼い時から、中学を卒業するまで、自分はほとんど毎日のように、あの川を見た。水と船と橋と砂洲すなすと、水の上に生まれて水の上に暮しているあわただしい人々の生活とを見た。真夏の日の午ひるすぎ、やけた砂を踏みながら、水泳を習いに行く通りすがりに、嗅かぐともなく嗅いだ河かわの水のおいも、今では年とともに、親しく思い出されるような気がする。

自分はどうして、こうもあの川を愛するのか。あのどちらかと言えば、泥濁りどろにごのした大川のなま暖かい水に、限りないゆかしさを感じるのか。自分ながらも、少しく、その説明に苦しまずにはいられない。ただ、自分は、昔からあの水を見るごとに、なんとなく、涙を落したいような、言いがたい慰安と寂寥せきりょうとを感じた。まったく、自分の住んでいる世界から遠ざかって、なつかしい思慕と追憶との国にはいるような心もちがした。この心もちのために、この慰安と寂寥とを味わうるがために、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄もやと青い油のような川の水と、吐息といきのような、おぼつかない汽笛の音と、石炭船の鳶色とびいろの三角帆と、——すべてやみがたい哀愁をよび起すこれらの川のながめは、いかに自分の幼い心を、その岸に立つ楊柳ようりゆうの葉のごとく、おののかせたことであろう。

この三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林ぞうきばやしのかけになっっている書齋で、平静な読書さんまい三昧さんまいにふけていたが、それでもなお、月に二、三度は、あの大川の水をながめにゆくことを忘れなかった。動くともなく動き、流るるともなく流れる大川の水の色は、静寂な書齋の空気が休みなく与える刺戟しげきと緊張とに、せつないほどあわただしく、動いている自分の心をも、ちようど、長旅に出た巡礼が、ようやくまた故郷の土を踏んだ時のような、さびしい、自由な、なつかしさに、とかしてくる。大川の水があつて、はじめて自分はふたたび、純なる本来の感情に生きることができるのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやわらかな風にふかれて、ほろほろと白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜よに、暗い水の空を寒むそうに鳴く、千鳥の声を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、ことごとく、大川に対する自分の愛を新たにす。ちようど、夏川の水から生まれる黒蜻蛉とんぼの羽のような、おののきやすい少年の心は、そのたびに新たな驚異の眸ひとみを見はらずにはいられないの

である。ことに夜網よあみの船ふなの舷なばたに倚たよつて、音もなく流れる、黒い川をみつめながら、夜と水との中に漂う「死」の呼吸を感じた時、いかに自分は、たよりのないさびしさに迫られたことであろう。

大川の流れる見るごとに、自分は、あの僧院の鐘の音と、鶺鴒くぐいの声とに暮れて行くイタリアの水の都——バルコンにさく薔薇ばらも百合ゆりも、水底みなそこに沈んだような月の光に青ざめて、黒い柩ひつぎに似たゴンドラが、その中を橋から橋へ、夢のように漕こいでゆく、ヴェネチアの風物に、あふるるばかりの熱情を注いだダンヌンチヨの心もちを、いまさらのように慕わしく、思い出さずにはいられないのである。

この大川の水に撫愛ぶあいされる沿岸の町々は、皆自分にとつて、忘れがたい、なつかしい町である。吾妻橋あづまばしから川下ならば、駒形こまかた、並木、蔵前くらまえ、代地だいち、柳橋やなぎばし、あるいは多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——どこでもよい。これらの町々を通る人の耳には、日をうけた土蔵の白壁と白壁との間から、格子戸こうしどづくりの薄暗い家と家との間から、あるいは銀茶色の芽をふいた、柳とアカシアとの並樹なみきの間から、磨みがいたガラス板のように、青く光る大川の水は、その、冷やかな潮のにおいととも、昔ながら南へ流れる、なつかしい

ひびきをつたえてくれるだろう。ああ、その水の声のなつかしき、つぶやくように、すねるように、舌うつように、草の汁をしぼった青い水は、日も夜も同じように、兩岸の石<sup>いしが</sup>崖<sup>け</sup>を洗つてゆく。班女<sup>はんじょ</sup>といい、業平<sup>なりひら</sup>という、武蔵野<sup>むさしの</sup>の昔は知らず、遠くは多くの江戸<sup>じょう</sup>浄瑠璃<sup>じょうるり</sup>作者、近くは河竹黙阿弥<sup>もくあみ</sup>翁<sup>う</sup>が、浅草寺<sup>せんそうじ</sup>の鐘の音とともに、その殺し場のシユチンムングを、最も力強く表わすために、しばしば、その世話物の中に用いたものは、実にこの大川のさびしい水の響きであった。十六夜清<sup>いざよいせいしん</sup>心が身をなげた時にも、源之丞<sup>げんのじょう</sup>がとりおすがた鳥<sup>とり</sup>追<sup>お</sup>姿<sup>すがた</sup>のおこよを見そめた時にも、あるいはまた、鑄掛屋<sup>いかけや</sup>松五郎<sup>しょうごろう</sup>が蝙蝠<sup>こうもり</sup>の飛びかう夏の夕ぐれに、天秤<sup>てんびん</sup>秤<sup>はかり</sup>をにないながら両国の橋を通つた時にも、大川は今のごとく、船宿の棧橋<sup>さんばし</sup>に、岸の青蘆<sup>あおあし</sup>に、猪牙船<sup>ちよきぶね</sup>の船腹にもものういささやきをくり返していたのである。

ことにこの水の音をなつかしく聞くことのできるのは、渡し船の中であろう。自分の記憶に誤りがないならば、吾妻橋<sup>あづまばし</sup>から新大橋までの間に、もとは五つの渡しがあった。その中で、駒形<sup>こまかた</sup>の渡し、富士見の渡し、安宅<sup>あたか</sup>の渡しの三つは、しだいに一つずつ、いつとなくすたれて、今ではただ一の橋から浜町へ渡る渡しと、御蔵橋<sup>みくらばし</sup>から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のままに残っている。自分が子供の時に比べれば、河の流れも変わり、芦<sup>ろ</sup>

荻てきの茂った所々の砂洲すみなずも、跡かたなく埋められてしまったが、この二つの渡しだけは、同じような底の浅い舟に、同じような老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のように青い河の水を、今も変わりなく日に幾度か横ぎっているのである。自分はよく、なんの用もないのに、この渡し船に乗った。水の動くのにつれて、揺ゆり籃かごのように軽く体をゆすられるこちよさ。ことに時刻がおそければおそいほど、渡し船のさびしさとうれしさとがしみじみと身にしみる。——低い舷の外はすぐに緑色のなめらかな水で、青銅のような鈍い光のある、幅の広い川かわ面は、遠い新大橋にさえぎられるまで、ただ一目に見渡される。両岸の家々はもう、たそがれの鼠ねずみ色いろに統一されて、その所々には障しょうじ子こにうつるともしびの光さえ黄色く靄もやの中に浮んでいる。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張った伝馬船てんまぶねが一艘せう、二艘とまれに川を上つて来るが、どの船もひっそりと静まって、舵かじを執とる人の有う無むさえもわからない。自分はいつもこの静かな船の帆と、青く平らに流れる潮のにおいとに対して、なんということもなく、ホフマンスタアルのエアレエプニスという詩をよんだ時のような言いようのないさびしさを感じるとともに、自分の心の中にもまた、情緒の水のささやきが、靄の底を流れる大川の水と同じ旋律をうたっているような気がせずにはいられないのである。

けれども、自分を魅<sup>み</sup>するものはひとり大川の水の響きばかりではない。自分にとつては、この川の水の光がほとんど、どこにも見いだしがたい、なめらかさと暖かさを持つているように思われるのである。

海の水は、たとえば碧<sup>ジャスパア</sup>玉の色のようあまりに重く緑を凝らしている。といつて潮の満干<sup>みちひ</sup>を全く感じない上流の川の水は、言わばエメラルドの色のように、あまりに軽く、余りに薄つぺらに光りすぎる。ただ淡水と潮<sup>ちようすい</sup>水とが交錯する平原の大河の水は、冷やかな青に、濁つた黄の暖かみを交えて、どこことなく人間<sup>ヒユウマナイズ</sup>化された親しさと、人間らしい意味において、ライフライクな、なつかしさがあるように思われる。ことに大川は、赭<sup>あか</sup>ちやけた粘土の多い関東平野を行きつくして、「東京」という大都会を静かに流れているだけに、その濁つて、皺<sup>しわ</sup>をよせて、気むずかしいユダヤの老翁<sup>ろうや</sup>のように、ぶつぶつ口小言を言う水の色が、いかにも落ついた、人なつかしい、手ぎわりのいい感じを持つている。そうして、同じく市<sup>まち</sup>の中を流れるにしても、なお「海」という大きな神秘と、絶えず直接の交通を続けているためか、川と川とをつなぐ掘割の水のように暗くない。眠つていない。どこことなく、生きて動いているという気がする。しかもその動いてゆく先は、無始無終に



わたる「永遠」の不可思議だという気がする。吾妻橋、厩橋うまやばし、両国橋の間、香油のよ  
うな青い水が、大きな橋台の花崗石かこうせきとれんがとをひたしてゆくうれしきは言うまでもな  
い。岸に近く、船宿の白い行灯あんどんをうつし、銀の葉うらを翻す柳をうつし、また水門にせ  
かれては三味線しゃみせんの音ねのぬるむ昼すぎを、紅芙蓉べにふようの花になげきながら、気のよわい家鴨あひる  
の羽にみだされて、人けのない廚くりやの下を静かに光りながら流れるのも、その重々しい水の  
色に言うべからざる温情を蔵していた。たとえ、両国橋、新大橋、永代橋えいたいばしと、河口に近  
づくに従って、川の水は、著しく暖潮の深藍色しんらんしよくを交えながら、騒音と煙塵えんじんとにみち  
た空気の下に、白くただれた目をぎらぎらとブリキのように反射して、石炭を積んだ達だるま  
磨船ぶねや白ペンキのはげた古風な汽船をもものうげにゆすぶっているにしても、自然の呼吸  
と人間の呼吸とが落ち合って、いつの間にか融合した都会の水の色の暖かさは、容易に消  
えてしまうものではない。

ことに日暮れ、川の上に立ちこめる水蒸気と、しだいに暗くなる夕空の薄明りとは、こ  
の大川の水をして、ほとんど、比喻ひゆを絶した、微妙な色調を帯ばしめる。自分はひとり、  
渡し船の舷ひしに肘ひじをついて、もう靄もやのおりかけた、薄暮の川の水面みのもを、なんともな  
く見渡しながら、その暗緑色の水のあなた、暗い家々の空に大きな赤い月の出を見て、思

わず涙を流したのを、おそらく終世忘れることはできないであろう。

「すべての市いちは、その市に固有なおいを持つている。フロレンスにおいては、イリスの白い花とほこりと靄いにしえと古の絵画のニスとのおいである」（メレジュコウフスキイ）もし自分に「東京」のにおいを問う人があるならば、自分は大川の水のにおいと答えるのになんの躊躇ちゆうちよもしないであろう。ひとりにおいのみではない。大川の水の色、大川の水のひびきは、我が愛する「東京」の色であり、声でなければならぬ。自分は大川あるがゆえに、「東京」を愛し、「東京」あるがゆえに、生活を愛するのである。

（一九一・一）

その後「一の橋の渡し」の絶えたことをきいた。「御蔵橋すたの渡し」の廃すたれるのも間があるまい。

# 青空文庫情報

底本：「羅生門・鼻・芋粥」角川文庫、角川書店

1950（昭和25）年10月20日初版発行

1985（昭和60）年11月10日改版38版発行

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月11日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 大川の水

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>